

# 男が介護するということ

## —家族・ケア・ジェンダーのインターフェイス—

斎藤 真緒\*

近年日本でも、「男性介護者」—妻を介護する夫、親を介護する息子—が増加している。本稿は、日本の男性介護者の現状と支援の課題を整理した上で、今後の男性介護者研究の射程を欧米の先行研究から抽出することにある。従来介護は女性の問題と見なされてきており、男性介護者の問題は不可視化される傾向にあった。2006年に実施された全国男性介護者調査によって、老老介護、介護者の健康上の問題、仕事の継続の困難の他に、家事における困難、地域関係の縮小といった問題が浮かび上がってきている。欧米では、男性介護者を研究する視点として、変化に富んだ介護生活を包括的に捉えるライフコース・パースペクティブが注目されていると同時に、介護を通じた男性性の変容・再構築にかかわる調査研究が進展している。今後日本でも、ジェンダーセンシティブな男性介護者支援プログラムの開発が求められる。

キーワード：男性介護者，ケア，男性性，家族責任

### はじめに—問題の所在と本稿の課題

従来、「ジェンダーを前提とした親族関係の義務」(Ungerson, 1987=1999)に則って、介護は女性の役割として位置づけられてきた。それは、女性によって担われる「愛の労働」であり、それゆえ無償であった。春日は現在日本における介護をめぐる構造的特性を、「介護=女性役割とみなすジェンダー規範が支配する社会」としている(春日, 2001)。「ケア=女性役割」という自明化された価値規範およびそれに基づく性別分業体制そのものの批判的検討は、家庭の中で行われていた労働を可視化すると同時に、

介護保険制度の導入を契機とする「介護の社会化」の進展において重要な役割を果たしたといえよう。

しかし近年日本でも、男性介護者—妻を介護する夫、親を介護する息子—が増加している。2004年「国民生活基礎調査」(厚生労働省)によれば、同居の主たる介護者のうち、4人に1人(28.2%：世帯票)が男性となっており、高齢夫婦世帯の増加等によって、今後ますます男性介護者の割合が増加することが見込まれる。本稿の目的は、日本の男性介護者の現状と支援の課題を整理した上で、今後の男性介護者研究の射程—視点と課題—を欧米の先行研究から抽出することにある。

\*立命館大学産業社会学部准教授

## 1. 男性介護者の登場と介護者モデルの変容

超高齢社会の到来は、介護の質が社会の豊かさを示す重要な指標になることを意味する。男性介護者の増加は、今後の介護の質にどのような影響を及ぼすのだろうか？

男性介護者に関する統計資料は決して多くない。各種統計調査においても、男性介護者の推移が分かる一貫したデータは存在しない。「統計とジェンダー」という観点から考えると、介護問題が女性問題として位置づけられていたからこそ、男性介護者の存在とその実態については、十分光が当てられることが少なかったとも言える。

家族介護に関する最も古いデータとしては、1968年に全国社会福祉協議会（以下、全社協）が実施した「寝たきり老人実態調査」があるが、ここでの選択項目は、「嫁」（49%）、妻が多数を占めると想定されている「配偶者」（27%）、「娘」（14%）となっており、男性は選択項目としてすら想定されていない。同じく全社協で1977年に実施された「老人介護の実態調査」（1977年）では、女性が86.9%（嫁37.0%、妻24.7%、娘17.8%等）で、男性は9.0%（夫5.7%、息子2.4%等）となっている。さらに10年後の1987年に実施された「在宅痴呆老人の介護実態調査」では、女性81.0%（嫁45.9%、妻16.9%、娘15.4%等）、男性15.6%（夫4.5%、息子10.1%等）となっている。

2004年の「国民生活基礎調査」を見てみると、夫の割合は13.2%、息子は12.2%と、その割合は大きく増加している。他方で、嫁が大半を占めると思われる子の配偶者は、23.3%と半減している。つまり、「嫁」の割合の劇的減少の

一方で、介護の担い手としての男性一夫、息子が台頭してきている。1990年代以降の、介護保険制度の導入を基軸とする介護の「社会化」への政策転換を契機として、家族介護者モデルが着実に変容しつつある。つまり男性介護者の増加は、家族介護における「配偶者間介護」と「実子介護」への移行の一断面として理解することができるだろう。

## 2. 男性介護者に対する「まなざし」

Frazer は、新しい市民モデルとして、あらゆる人がケア役割を担う「普遍的ケア提供者」モデルを提唱し、ジェンダー化された有償労働と無償労働という二分法の脱構築を目指す際に、男性の変革を焦点化した（Frazer, 1997=2003）。

こうした視点は、ジェンダーとケアという観点から男性介護者の問題を考える際の一つの補助線となりうるだろう。実際に日本でも、家庭の中での介護者としてのみならず、介護専門職として、あるいは団塊世代を中心とした退職後の地域のボランティアとして、介護にかかわる男性の裾野は広がっている。介護保険制度が導入される以前の1998年にHarrisらが行った日本の男性介護者16名に対するインタビュー調査では、介護保険制度が導入を契機として、高齢者介護が伝統的な女性役割から離脱し、年齢や性に囚われず「両性化 androgenization」すると予測されていた（Harris et al., 1998 : 197）<sup>1)</sup>。

しかし、奥山（1997a, 1997b）や一瀬（2001, 2004）らの先駆的調査研究を例外として、男性介護者の介護実態に関する実証的研究はあまり進展していない。こうした遅延要因の一つとして、男性介護者に対する研究上の「まなざし」が深くかかわっていることを確認する必要がある。

る。

これまで介護の問題をジェンダーとの関連での捉える際の主要な論点は、「なぜ女性がケアを担うのか」という問いであり、「ジェンダー社会化」の過程（Chodorow, 1978=1981）やケアと女性性との結びつき（Gilligan, 1982=1986）などがくりかえし指摘されてきた。女性が育児や介護といったケアにかかわることは、まさにジェンダー実践に深く関与している。それに対して男性は、女性と比べて「自己と介護役割の分節化がなされやすい」（春日, 2001）存在として位置づけられてきた。つまり、「なぜ女性がケアを担うのか」という問いは、しばしば「なぜ男性がケアを担わないのか」という隠れた問いによって支えられていたともいえる。

Kramerによれば、男性介護者への言及には、従来2つのパターンがある。ひとつは、例外としての「できる男」という位置づけであり、もうひとつは、女性との比較においてケア役割をうまくこなすことができない「逸脱」「できない男」という位置づけである。しかしどちらのとらえ方も、あくまでもケアと女性性との結びつきを前提とした上で男性介護者が位置づけられており、それゆえにジェンダーとケアにかかわる抜本的再考には至っていないと Kramerは指摘している（Kramer, 2002）。

たしかに男性介護者の量的増加は着実に進行しており、介護者の性差は縮小傾向にある。しかし、男性介護者の量的増加が、ケアをめぐるジェンダー境界の再編成や、個々人の行動様式の変革に自動的に連結されるわけではない。とりわけ近年、この点にかかわって重大な問題が指摘されてきている。高齢者虐待や介護殺人・介護心中という問題である。

2006年に遅ればせながら高齢者虐待防止法が

施行されたが、高齢者虐待においては息子を加害者とする事例が30%を超えて突出している（小林, 2004）。また介護殺人を新聞記事から抽出し分析を行った加藤によれば、1998年から2003年までの介護保険制度導入前後の6年間に起こった介護殺人の件数は198件、死亡者数は201人にのぼる。加害・被害の関係をみていくと、加害者199名中、男性は151名と4分の3を占め、息子が37.4%、夫34.3%であった。（加藤, 2005）。介護者の割合では男性は4分の1であるのに対して、虐待や介護殺人ではその性別比率が大きく逆転しているという無視できない現状がある。

Frazerが提起した「普遍的ケア提供者」モデルの実現—男性の変革—は、単に男性介護者の量的増加だけでは達成されえない。男性介護者が実際に直面している介護実態を明らかにし、必要な支援プログラムを開発することを通じて、理念と実態との間隙を丁寧に埋めていくための社会的実践とそれを支える研究蓄積が求められている。

### 3. 男性介護者全国調査

2006年10月、男性介護者に対する初の全国アンケート調査が実施された。本調査は、全国20の日本生活協同組合連合会医療部会の介護事業所・病院・診療所の職員を通じてアンケート500票を直接配布し、回収は郵送で行った（有効回収票数は295票、有効回収率59%）（津止, 斎藤, 2007）。以下では、今後の研究課題とのかかわりにおいて重要だと思われる点のみに限定した上で、全国調査を通じて明らかになった男性介護者の特徴について概観する。

### 3-1. 介護者および被介護者の属性

介護者の年代は70代が最も多く、平均年齢は69.3歳（最年少36歳，最年長93歳）であり，高齢男性介護者の多さが浮き彫りとなった<sup>2)</sup>。介護者の健康状態は，57.3%（169名）の男性介護者が「通院」しており，「通院はしていないが不調」を含めると65.1%（192名）が健康ではない状態で介護をしている状態にあった。健康に対する不安は大きく，介護意欲にも深刻な影響を及ぼしており，介護と自らの健康という面において，二重の負担を抱えながら生活を強いられている様子がうかがえる。

仕事については，高齢男性介護者が多いこともあって74%（218名）が現在仕事に就いていない状態であった。離職理由は「定年退職」が59.8%（129名），次いで「介護を理由とする退職」21.6%（47名），「失業・倒産」6.9%（15名）であった。また調査項目としては設けていなかったが介護者自身の体調や病気を理由とする離職者も10名いた。介護と仕事の両立の困難性が経済的生活基盤に直接影響を及ぼしており，健康状態も含めて，家族介護の背景にある経済的・身体的・精神的問題の一因となっている。

被介護者の年齢は，年代で見ると70代が最も多く，平均年齢は79.1歳（最年少50歳，最年長102歳）であり，介護者の平均年齢よりも約10歳上回っている<sup>3)</sup>。被介護者の介護認定状況については，要介護度5が最も多く69名（23%），次いで要介護度4が61名（21%），要介護度3が58名（20%）と，要介護度の高さが顕著に現れた。介護期間では3-5年が最も多く82名（29%），5-10年が77名（27%）となった。平均介護期間は5年2ヶ月と，介護の「長期化」の様相が浮かび上がる。

### 3-2. 介護者と被介護者との関係

介護者と被介護者との関係を属性別で見ると，58.3%（172名）が妻であり，36.9%（109名）が親であった。親の内訳で最も多かったのは実母73名，次いで実父23名であった。

妻を介護する〈夫グループ〉と，親を介護する〈息子グループ〉の年代分布を見てみると，介護者の場合では，〈夫グループ〉は，60～80代，〈息子グループ〉は50～60代に集中している〔図1〕。60代男性は，〈夫グループ〉と〈息子グループ〉に二分化しており，妻と親との「ダブル介護」の可能性を示唆している。60代は介護役割における「転換期」であるといえる。

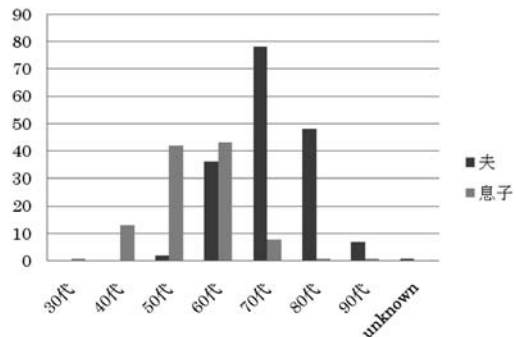


図1 男性介護者の年齢別分布

出典：津止・斎藤，2007，50頁を参照して作成。

世帯規模は2人世帯が最も多く58.3%（172名）であった。2人世帯の内訳については「夫婦世帯」が115名，次いで「実母との二人暮らし」(40名)，「実父との二人暮らし」(10名)となった。また2人世帯のうち実に156世帯(52.9%)が介護者と被介護者との二人暮らし(妻108名，実母39名，実父9名)であり，閉鎖的な家族介護環境が推測される。

### 3-3. 介護生活

従来の調査研究では，介護は女性の問題とさ

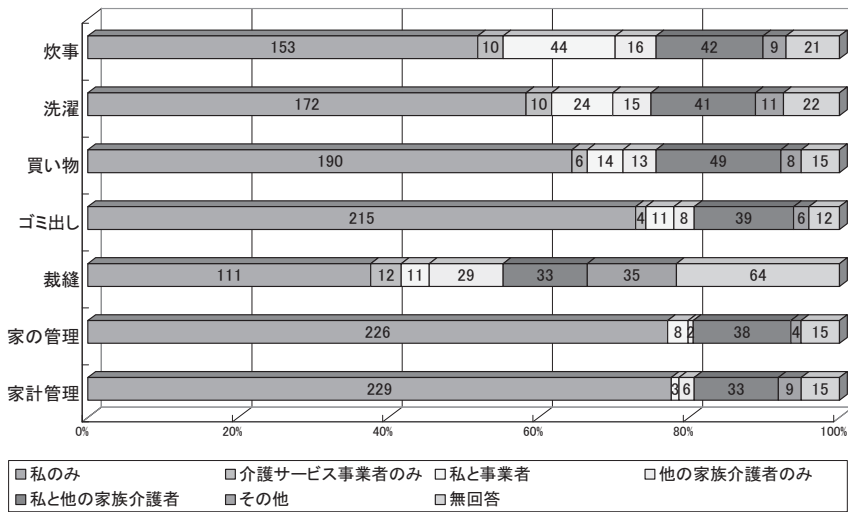


図2 家事行為 (n=295)

出典：津止・斎藤，2007，55頁。

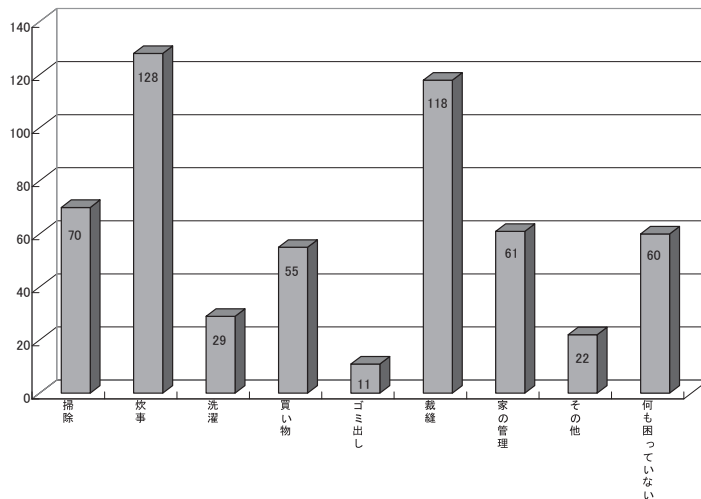


図3 家事で困っていること (複数回答)

出典：津止・斎藤，2007，55頁。

れ、女性の家事・介護スキルは暗黙の前提とされてきたため、介護・家事スキルに関する質問項目が設定されているものはほとんど存在しない。そこで今回の調査ではあえて家事や介護の分担や困難について質問項目を設定した。

家事行為については、ほとんどの行為について、半数以上の介護者が自分のみで遂行しているが [図2]、「何も困っていない」という介護

者が60名を占める一方で、困っているものとしては「炊事」43.4% (128人)、「裁縫」40% (118人)、「掃除」23.7%などがあった [図3]。「コーヒー一杯入れたことがなかったのに家事をするようになった」(70代，妻を介護) など365日家事に追われる大変さを身をもって体験している男性介護者の自由回答もあった。

介護行為については、洗髪，入浴介助，身体

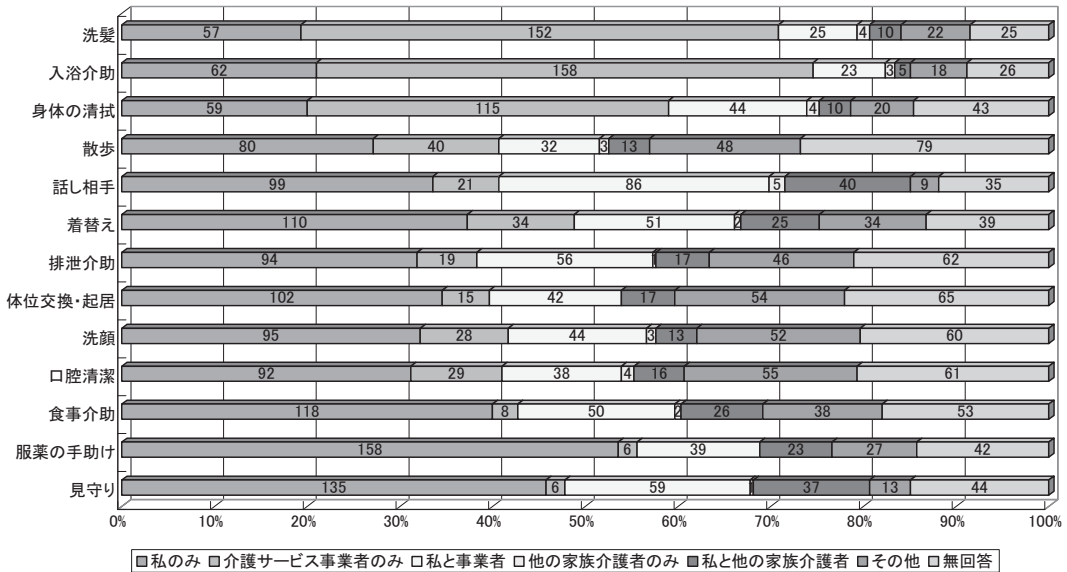


図4 介護行為 (n=295)  
出典：津止・斎藤，2007，57頁。

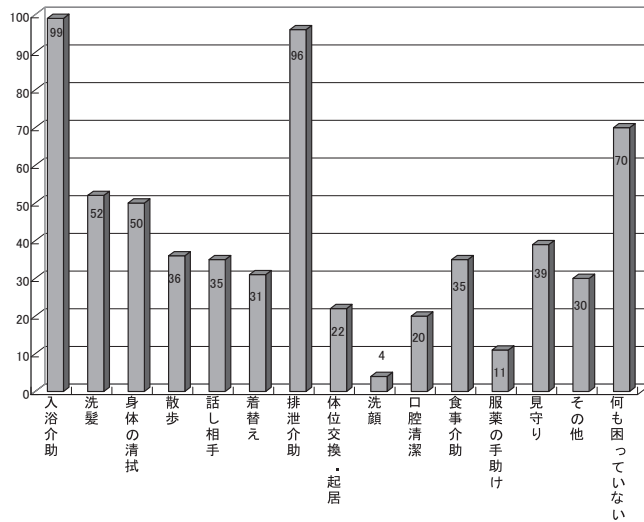


図5 介護で困っていること (複数回答)  
出典：津止・斎藤，2007，58頁。

の清拭など、定型化できる行為については、事業化されているものも多いが〔図4〕、不規則な「排泄介助」のほかに「入浴介助」や「洗髪」「身体の清拭」など、身体接触を伴う介護について困っている男性介護者が多かった〔図5〕。ジェンダー化された社会化過程において家事

スキルの習得を要求されることが少ない男性にとって、家事・介護スキルのばらつきやスキル獲得のための支援が決定的に不足していることが、介護生活における障壁となり介護に対する負担感を増幅させる要因となっている。とりわけ介護スキル以前の問題として、家事を中心と

する男性の生活的自立能力が問われており、家事スキルの有無が、男性介護者が抱える困難や負担の最初の分岐点となっている。

以上のことは、介護以前に家事という生活的自立という課題を突きつけられる男性介護者が多いということだけではなく、現在の介護サービスが、家族介護者の家事スキルの習得を与件としていることを逆照射する結果となっている。奇妙なことに現行の介護保険制度では、同居家族がいる場合、食事の介助といった生活援助を中心とするヘルパー派遣は原則的に禁止となっている。これは本来の介護保険制度の理念からも大きく乖離した考え方である。家族資源や家族関係に左右されない、被介護者自身に対する多様なニーズに即した社会サービスの抜本的充実が必要であることは論をまたないが、このことは、介護者支援と矛盾するものではない。むしろ、男性介護者のみならず、介護者一般の高齢化や病気などを考慮した家族介護者支援が決定的に欠如しているといわざるをえないだろう。

### 3 - 4. 地域関係

地域での居住歴は、66%（192名）が20年以上であり、地域での定住傾向が顕著であるが、男性介護者の介護以前の地域とのつきあいで最も多かったのは「挨拶をする程度のつきあい」（96名）であり、「ほとんどつきあいはない」（24名）を含めると40.7%を占める。

さらに介護開始後、地域でのつきあいに変化した男性介護者は65名、そのうち関係が縮小した男性介護者は40名であった。「つきあいがなくなった」男性介護者が24名となり、介護以前からつきあいが無い男性介護者と合わせると48名（16.3%）となる。しかし他方で、介護を契

機として地域関係が緊密になった男性介護者も19名（29.2%）存在している。退職後の男性を中心とする男性の孤立化が地域社会の大きな問題となっていることもふまえるならば、介護を契機とする地域関係の変化は、男性介護者の支援の重要な契機として受け止める必要があるだろう。

## 4. 男性介護者研究の射程

仕事との両立、家事・介護スキル、孤立化といった日本の男性介護者の現状と課題を踏まえた上で、以下では、北米およびヨーロッパを中心として進展している男性介護者の研究の主要な論点を整理することによって、今後の男性介護者研究の射程を描出してみたい。ちなみにアメリカでは、日本よりも早いペースで男性介護者の増加が進んでいる。全米介護者連盟（National Alliance for Caregiving : NAC）による調査によると、1987年の時点ですでに男性介護者の割合は25%となっており、1997年には28%、そして2004年には39%に至っている（National Alliance for Caregiving and AARP, 2004）<sup>4)</sup>。

### 4 - 1. 男性介護者研究の変遷

欧米での高齢者介護の研究は1980年代から本格化するが、初期段階では「家族」や「老親」といった、ジェンダーニュートラルな概念をツールとした研究がほとんどであった。その後、女性介護者に関心が集中することによって、ジェンダーにかかわる介護問題が次第に可視化されるに至る（Stoller, 2002）。女性介護者への関心の高まりと並行して、1990年代には介護ストレスおよびストレスマネジメントにおける量的

調査が進展した。しかし、性差という観点からの一連の調査結果から、男性介護者に関する一貫した傾向を抽出することは容易ではない。たとえば、介護ストレスに関する調査研究では、女性と比較して男性は、介護を仕事として割り切るために女性と比較してストレスが少なく、バーンアウトの割合が低い傾向が確認される一方で (Almberg, et. al., 1998)、ストレスに関する性差の存在は、男性がストレス経験が少ないことの証明ではなく、むしろ否定的な影響を対外的にさらそうとしない結果である可能性があるとの指摘もある (Davias et al., 1986)。また、男性介護者のソーシャルサポートに関する調査研究でも、仕事の延長線上に介護を位置づけ、ソーシャルサポートを積極的に活用する男性介護者の存在を指摘する調査結果と、外部にサポートを求めることを不名誉であると感じ、外部のサポートを活用しないことを男性介護者の一般的傾向として指摘する、全く矛盾する調査結果が提示されている (Russell, 2004)。

一連の調査研究結果に対して Thompson は、男性介護者にかかわる問題を女性問題というレンズを通した比較に矮小化しないことによって初めて、そのリアリティに迫ることが可能であると指摘している (Thompson, 2002)。女性との対比によって男性介護者を「均質化」することなく、むしろ男性介護者の多様な生きられた経験の内側に入り込む視点が男性介護者研究の重要なポイントとして次第に指摘されるようになる。すなわち、「女性の仕事」としての介護から「ジェンダー化された経験」としての介護というパラダイム転換である。

以下では、この新しいパラダイムに基づいて、ライフコース、男性性、家族介護者支援という3点にしばって、欧米の男性介護者研究の

特徴について述べていきたい。

#### 4-2. ライフコース・キャリア・移行

欧米でも家族規模の縮小およびライフスタイルの多様化によって、介護にかかわる家族資源は枯渇化する傾向にある。縮小および複雑化する家族、女性の労働市場への参入、そして高齢化という一連のプロセスの中で登場してきた男性介護者を分析する視点として、「ライフコース・パースペクティブ」が近年重視されている (Arber et. al., 2003)。これは、男女の比較という静態的な視点から脱却し、多様性や長期的変化を視野に入れたダイナミックな過程として介護を捉える視点として有効であるとされている。このことによって、一見全く相反する調査結果が、社会的な文脈に即して理解することが可能になる。

とりわけ男性にとって介護キャリアとは、自己選択的な要素が強い職業キャリアとは異なり、「予期せぬキャリア」としての意味合いが強い (Pearlin, et al., 1994)。突如介護キャリアに直面することによって、男性のライフコースは激変し、新しい役割取得を含む役割変化を余儀なくされる。

介護役割の受容や対応のあり方は、社会的・個人的条件によって多様でありうる。ライフコース・パースペクティブでは、流動性に富んだ長期にわたる介護生活を包括的に捕捉するために「過程」が重視される。それは単に多様性を強調するためだけではなく、介護生活の軌跡に共通する多元的な移行ポイント—分岐点—の抽出を目的としているためである (Kramer and Kambert, 1999)。介護の過程には、初期段階における介護役割とその受容過程、被介護者および介護者の健康状態の悪化、収入の変化とケア



サービスの利用、介護の長期化に伴うストレスの増加、介護者の個人的・社会的資源の枯渇、施設入所の決断をめぐる困難、死別、回復などが含まれる。たとえば Cavaye は介護者が公的サービスを利用するに至るプロセスの特徴を、介護に対する自覚、責任の受容、サービスなしの介護、ケアスキルの獲得、浮き沈み、サービスへのアクセス、クライアントとしての介護者、ケアの継続、新しい地平という9つの段階でモデル化した (Cavaye, 2006: 19-22)。こうした社会的文脈に即した分岐点の分析は、介護者のそれぞれの段階に応じた継続的支援という観点からも重視されている (Nolan, et al., 1996)。

さらに介護の軌跡を通じて、介護者の外的および内的生活がいかに変化し再組織化されていくのかに注目することによって、支援を具体化できる。Pearlin らは、介護そのもののストレスの軽減のみならず、介護の周辺部で生じている副次的なストレス (経済的困難、家族内コンフリクト、社会活動の制約、自己概念のゆらぎ) の除去が重要であるとしている (Pearlin, et al., 1994)。また理論的飽和という観点からは不十分であるとはいえ、男性介護者の多様性に応じた調査研究、具体的には息子や夫といった属性別の質的調査や、人種に注目した調査などが進行している (Houde, 2002)。

#### 4-3. 介護と男性性の交錯

##### —ケアとジェンダーの新しい地平へ—

介護を通じたライフコースの変化は、男性介護者にとって、男性としての自己アイデンティティ、すなわち男性性の再構築とも密接にかかわっている。すなわち介護と男性性という問題群である。Connell は、女性の従属と特定の男性

の周縁化をもたらす「覇権的男性性 hegemonic masculinity」を頂点とした、男性性に関する分析枠組みを提示した (Connell, 2005, 多賀, 2006)。男性性は決して一枚岩ではなく、重層性・多様性を帯している。男性としてのアイデンティティは、理想化された男性性イデオロギーとの不一致・緊張・抵抗を含む交渉および解釈の過程であり、それは日常生活を通じて暫定的かつ不断に構築されるものである (Connell and Messerschmidt, 2005)<sup>5)</sup>。Thompson は、高齢男性の存在に着目し、仕事をもっている若い男性を模範とする覇権的男性性 (hegemonic masculinity) の影響の下で、高齢男性が周縁化されていることを指摘し、高齢男性の生活経験を理論化する必要性を訴えた (Thompson, 1994)。これをきっかけに、介護と男性性とエイジングとの交錯の中で、男性介護者研究が大きく発展する。男性が介護を担うことは、男性性の放棄を必ずしも意味しない。介護を通じて男性のジェンダー・アイデンティティがどのように変化し修正され再構築されていくのか、その変化のバリエーションを丁寧に検討し、介護と男性性との相互作用を詳細に検討した研究が増えている (Kramer and Thompson, 2002: Calasanti, 2004)。

近年の調査研究では、自らの男らしさを維持しようと試行錯誤する男性介護者の姿が浮かび上がりつつある (Moss & Moss, 2006: Calasanti and Bowen, 2006: Ribeiro et al., 2007)。たとえば、妻を介護する夫の場合、妻へのコントロールと介護にかかわるさまざまなマネジメントを通じて、妻を依存的な存在として位置づけ続けることによって、夫としての立場を強化し、男性としてのアイデンティティを保持する傾向が示されている (Harris, 1993)。

Gollins は、男性介護者のジェンダー化された自己理解と、介護者としての自己理解との相互作用について分析しており、男性介護者の語り、介護者としての感情を表面化することが少ないのに対して、夫としての立場（責任）や感情（妻への愛情や恩返し）への言及が多いことを指摘している（Gollins, 2002）。また親を介護する場合には、仕事（の継続）が、男性であることの存在証明として重要な役割を果たす（Harris, 1998）。

Harris (1993) は、男性介護者を4つのタイプに類型化している。第1のモデルは、家の外での仕事の延長線上に介護を捉えようとするタイプである。介護義務を新たな労働として位置づけ、合理的かつプラグマティックにこなして行こうとする。第2のモデルは、愛情としての介護であり、あらゆる時間とエネルギーを被介護者に注ぎ込むタイプであり、社会的孤立が深刻化しやすい。第3のモデルは義務としての介護である。第1と第2のモデルが、仕事あるいは愛情という異なる意味づけに由来しつつも、積極的に介護役割を遂行しようとするのに対して、第3のモデルは、可能な限り介護と自分の生活とを分節化しながら介護をこなす、消極的なタイプである。第4のモデルは、岐路に立つ男性としての介護者というタイプである。介護という「予期せぬキャリア」によって、介護を含む自らのあらゆる役割とそれを支えるアイデンティティをマネジメントできず、人生の方向性を失っているタイプである。このタイプは、早急なサポートを要する集団として位置づけられている。とくに第1の仕事としての介護というタイプは、「プロフェッショナルモデル」（Thompson, 2002）と見なされることがあり、男性性を活かした介護の方法として位置づけら

れている。つまり、仕事として介護を行うことによって、介護者自身のメンタルヘルスにうまく対応できたり、介護に没頭することがうまく回避できるという点で高く評価されている。こうした分類を踏まえて Russell は、「マネジメント」+「ケア」というアイデアによって、女性的と見なされてきた介護に新しい地平を切り拓くことができると提案している（Russell, 2007a, 2007b）。

介護と男性性に関する研究蓄積は、ケアとジェンダー、とりわけケアと男性性との交錯という新しいケア研究の領域として位置づけうる。少なくとも、男性が介護役割を担うということは、男女の性別役割が逆転する「クロスオーバー」（Friedan, 1993=1995）には容易には連結しない。Harris の類型は、ひとつの参照枠組みとして有効ではあるが、4つのモデルの相互関係が不明である点や、ケアとマネジメントを対極的に捉える点など、問題点も少なくない。類型化だけではなく、ライフコース・パースペクティブにおいて追求されているような分岐点の探求、すなわち特定の社会的文脈のもとで、いかに介護と男性性が交錯し共存しているのか、どのような契機によって男性性が変調をきたすのか、そのプロセスに着目した研究蓄積が必要となる。また Connell らは、「男性性の地政学」という観点から、男性性と地域性に対する理解が重要であると主張している（Connell & Messerschmidt, 2005）。このことを日本の男性介護者分析に応用するならば、現在参照されている西洋白人男性をモデルにした男性性とは異なるアспект、すなわち「アジア型男性性」という問題に取り組む必要があるだろう（Louie and Low, 2003 ; Taga, 2005）。

#### 4-4. 家族介護者支援をめぐる課題

男性介護者研究においてももう一つ重要なテーマは、男性にとっての家族をめぐる意味づけの変容である。男性介護者の登場は、表層的には性別役割分業構造が止揚されるという点において近代家族を支えてきたジェンダー構造を部分的に融解する一方で、同時に夫婦愛・親子愛という「近代家族」の愛情原則を強化する作用を潜在的に包摂している。男性介護者の増加は、愛情原則や自助原則に基づく「近代家族」規範の変容とどのように結びついているのだろうか。

家族介護は、介護者にとって「やりがいがある（rewarding）」が同時に「過酷（demanding）」な労働である。Harrisの第二のタイプにも示されているように、男性介護者が、夫婦愛あるいは親子愛の体現として、全身全霊で介護に没頭することがある。このことには、介護者自身の内的要因だけではなく、家族構成員間での介護役割の配分をめぐる交渉や葛藤といった外的要因も大きくかかわっている。具体的には、兄弟姉妹を中心とする家族資源の有無にかかわる介護役割のジェンダー間およびジェンダー内での再編成といった問題、別居・同居・近居といった居住条件や仕事の有無や労働条件にかかわる、主たる介護者（第一次介護者）とそれ以外の従たる介護者（第二次介護者以降）との間で

の介護責任をめぐる問題や条件交渉などが挙げられよう。

先に述べた介護心中や介護殺人に典型的に示されているように、介護を媒介とする濃密な家族関係は、愛情だけではなく、しばしば強い否定的な感情をももたらす。こうした「両価的感情経験」こそが家族介護の大きな特徴である（Mac Rae, 1998）。それゆえに家族介護の閉塞化は、否定的感情の誘発要因ともなりうる（天田, 2004）。それゆえに家族介護に第三者が介在する契機、すなわちサービスの利用や地域を含む介護者の人間関係の活性化、社会活動への参加の保障といった、家族支援が重要になる（藤崎, 2000）。

家族介護者を中心とするインフォーマルな介護者に対する注目と再評価という社会的文脈において、欧米では家族支援の一環としての家族介護者支援への関心が高まっている。介護者支援には、レスパイトケアや介護者のためのサポートグループといった直接的支援と、介護者の置かれている環境を考慮したサービスの提供などの間接的支援がある（Cavaye, 2006）。しかしその吟味に際して、フォーマルなケアの提供者である専門職と、ケアの受け手である被介護者とを含む三者関係を射程に入れなければならない〔図6〕。

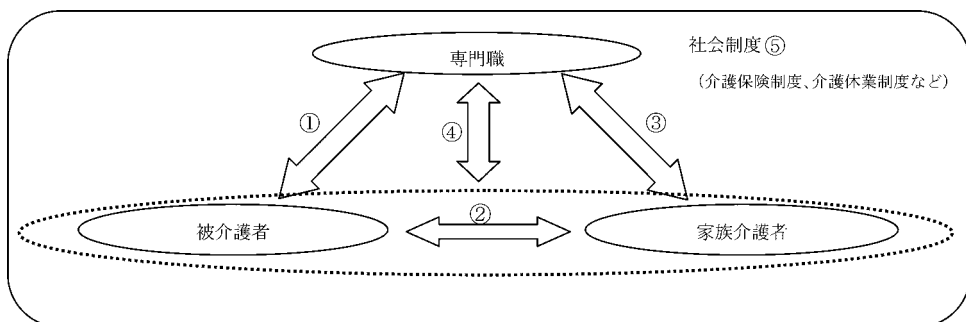


図6 ケアの関係性

専門職と被介護者との関係性 (①) については従来から論じられてきたが、ここでは、「不明瞭かつ両義的」な (Cavaye, 2008: 16) 専門職と家族介護者との関係性 (③) の有り様が問われていると同時に、不可視化かつ閉塞化しがちな家族介護関係 (②) の特質、およびそれを踏まえたうえでの家族の関係性への支援 (④)、それを支える社会制度のあり方 (⑤) が問われることとなる。なぜならば、介護者の負担軽減を目的とする代替的サービス提供は、必ずしも介護者のストレスの減少にはつながらないからである (Cavaye, 2008: 17) このことは、介護保険制度の導入以降も家族介護者の負担感が軽減していないという近年の調査結果に照らしても傾聴に値する。

欧米の家族介護者支援研究には、2つの動向が確認できる。1つはヨーロッパでのマクロレベルにおける社会政策としての家族介護者支援策に関する研究であり、もう1つは、北米を中心とする地域コミュニティを主軸としたミクロレベルでの家族介護者支援プログラムの開発に関する研究である。

日本でも近年ヨーロッパの家族介護者政策に対する関心が高まりつつあるが (岩間, 2003; 井上, 2005; 藤岡, 2008, 三富, 2008), その中でもイギリスは家族介護者支援政策をいち早く実施した国として注目されている。

イギリスで「介護者 carer」という概念が公的文書に登場したのは1980年代半ばである。フェミニズムの視点が導入されたことによって、女性の仕事の中に埋没されていた介護労働が可視化させるようになった。1990年代に入り、男性介護者、エスニックマイノリティ、さらには夫婦・子供・非親族といった家族関係に即した介護者の類型化が進められるようになる。家族

介護者の「承認」「定義」「要求」「正当性」という社会的な構築過程は、その最終段階としての「制度化」へと結実する (Bytheway and Jhonson, 1998)。

イギリス政府は1999年に『介護者へのケア：介護者のための国家戦略』を発表し、選択、消費者によるコントロール、有償労働へのアクセス、ソーシャルインクルージョンを柱とする体系的な介護者支援政策を提起している (Department of Health, 1999)。この報告書の中で、介護者へのケアは以下のように定義されている。

「介護者自身の生活、そして彼らが必要とするサービスの範囲・内容・タイミングについて、介護者に対してより多くのコントロールを与えること。つまり、介護者がかかわるケアの範囲、雇用の継続、情報の提供、地域生活へのコミットメントについて、現実的な選択肢を提供する」 (Department of Health, 1999: 62)<sup>6)</sup>

報告書では、住宅問題や、介護による疾病・障害の予防、定期的な休息 (レスパイトケア) の重要性などが強調されている。特筆すべきは、「介護者に優しい雇用政策 (carer-friendly employment policies)」が促進されている点である。介護休業制度やフレキシブルな働き方の承認、仕事への復帰の促進、失業者に対する特別支援といった一連の政策は、単に介護者の利益だけではなく、優れた人事管理は高い収益性に繋がるという経営理念に基づいていると報告書は主張している。

この報告書は、イギリスのコミュニティ・ケア政策の一環として位置づけられており、被介護者の視点の欠如や介護者の固定化といった批判もある (Lloyd, 2000)。たしかに従来介護者に対する経済的支援については、従来日本で

も、介護者の固定化につながるという理由から、否定的な見解が少なくない。しかし、ケアによる「二次的依存」と貧困との密接な連関を想起するならば、介護を契機とする困窮化に対する経済的支援（財源、対象、金額、期間など）は、もはや回避できない政策的課題となりつつある。

他方北米では、1980年代半ばから、男性介護者に特化した具体的なサポートプログラムの開発およびそれにかかわる実証的研究が精力的に進められている（Davies, et al., 1986 : Moseley Jr., et al., 1988 : Kaye and Applegate, 1993）。Daviesらは、男性介護者への支援のポイントとなる男性介護者のニーズを4点挙げている。第1に、承認に対するニーズであり、男性の介護経験を普遍化し承認するプロセスを支援する取り組みを重視している。第2に、情報に対するニーズであり、これは介護を含む日常生活のマネジメントに対する問題関心の高さに対応した取り組みとして具体化される。第3に、ソーシャルネットワークの構築に対するニーズであり、とりわけ男性介護者同士のつながりの拡大が中心となる。第4に、入浴や食事の介助といった身体的ケアにかかわるスキルについてのニーズや葛藤がある。ここでは、とりわけ親子の間での異性間介護におけるセクシュアリティへの配慮が求められる。

男性は、合理性や効率性といった仕事を中心とする生活スタイルが身につけているために、情報の伝達・交換を中心とする「レポートトーク」に傾斜しがちで、感情表現にかかわる「ラポート・トーク」を不得手としているという指摘（伊藤、1996）にもあるように、男性介護者はとりわけ自分の否定的な感情を吐露することが難しく、彼らが抱えている困難は表面化しに

くい場合がある（McFarland and Sanders, 2000）。それゆえに、一般的な家族介護者支援の充実という観点だけではなく、閉塞化しがちな男性の社会的ネットワークの再構築、とりわけ自分の感情を抑制しがちな男性特有のコミュニケーションモードおよび価値規範に配慮した、ジェンダーセンシティブな「男性に優しい male-friendly」介入プログラムが今後ますます重要性を増すと考えられる。Kosbergは、男性のためのプログラムの開発について、男性介護者自身が抱えている問題を自ら承認しそれに向き合うために、問題の「標準化」が効果的であると指摘している（Kosberg, 2005）。またKaye and Crittendenは、男性への介入実践の原理として、自らの生活の変化を理解し適応することを支援する手段としての回想法（Life Review）、具体的かつ実践的な情報提供を基礎とするグループストラテジー、そして感情や関係性といったプロセス重視ではなく、目標が明確化された task-oriented approach を挙げている（Kaye and Crittenden, 2005）。さらに被介護者との意思疎通が難しいアルツハイマー病など、被介護者の疾病・障害によって家族介護者の身体的・精神的負担が異なるという理由から、疾病別に細分化されたサポートプログラムも開発されつつある（Parsons, 1997 : McFarland and Sanders, 2000）。

上記のマクロ・ミクロにおよぶ家族介護者研究の通奏低音は、ケアの社会的配置の変容—ケアをめぐる国家・市民社会・企業・家族・個人のパートナーシップ—、換言すればケアをめぐる家族責任と社会責任のせめぎあいである。「近代家族」はケアを通じた「具体的他者への配慮」としての愛情が発動される社会装置であり、「具体的他者への配慮」は家族の重要な成

立要件と見なされている。上野は、ケアの受け手とケアの与え手との相互関係の中で「ケアの人権」を提唱し、与え手による「ケアする権利」のほかに、「ケアすることを強制されない権利」、さらには受け手の側からの「ケアされる権利」と「ケアされることを強制されない権利」を提示し、ケア関係の均衡化を試みている（上野，2007）。その達成のためには、マクロな政策と地域コミュニティでのプログラム、そして家族の中でのケアという、一続きのグラデーションとしての「ケアスペクトラム」（斎藤，2003）を支える社会システムの構築が必要である。ケアの受け手のみならず、家族介護者に対する支援が、家族支援の中にどのように位置づけられるのかという問いは、家族責任およびそれをささえる家族規範がどのように再編され変容していくのかという、より根源的な問いとの往復作業の中で、丁寧に検討されなければならないであろう。

### おわりに—男性介護者研究の課題

Kramer は、男性介護者を研究する意義を以下の6点にわたって述べている（Kramer, 2002）。第1に、これまで無視ないしは周縁化されてきた男性を可視化すること。第2に、介護に対する男性の貢献を正当に評価すること<sup>7)</sup>。このことは、従来女性が引き受けてきた介護の負担を決して軽視するものではなく、むしろジェンダー間の共通点の発見にもつながる。第3に、インフォーマルサービスとフォーマルサービスとの関係性の再構築にかかわる問題への連結がある。とりわけ仕事と家族責任との両立のための条件整備を解明する重要な手がかりを男性介護者研究は提供してくれる。第4

に、男性介護者の社会的孤立や情緒的サポートの欠如といった問題点の解明。その点とかかわって第5に、男性介護者が直面する固有の問題、すなわち「弱みを見せない」といった男性性にかかわる問題。そして最後に、ジェンダーに配慮した介入プログラムの開発デザインである。

一連の先行研究をそのまま日本に導入できないことは当然であるが、今後の日本における男性介護者研究において有益な視点が多いこともたしかである。男性介護者研究において何よりも行ってはならないことは、「できる男」と「できない男」という分断線をなぞり強化することである。最近日本でも、男性の介護体験談などの出版活動が目立つ。そこに示されているような、器用でマルチな男性という積極性のみに着目するのではなく、また虐待や介護殺人といった事件に示めされている消極性・問題性のみを強調するのでもない。むしろ積極的側面と消極的側面とが共存・混在しているその「同時性」を、男性介護者がおかれている実像として総体的に捉える視点が求められている。それはまさに、ケアとエイジングと男性性との輻輳する領域である。誰もが老いても健やかに過ごすことができる、超高齢化に耐久力のある社会システムをどのように構築していくのかという大命題への手がかりとして、男性介護者をめぐる研究および社会的実践がそのひとつの補助線になりうるだろう。

### 文献リスト

- Almberg B, Jansson W., Grafstrom M, Winblad B., 1998, Differences between and within genders in caregiving strain: a comparison between caregivers of demented and non-caregivers of non-demented elderly people, in: *Journal of*

- Advanced Nursing*, 28: 849-858.
- 天田城介, 2004, 『古い衰えゆく自己の／と自由：高齢者ケアの社会的実践論・当事者論』ハーベスト社
- Arber, S., Davidson K., Ginn J. (eds.), 2003, *Gender and aging: changing roles and relationships*, Open University Press.
- Bytheway, B., Jhonson, J., 1998, The social construction of 'carers', in: Anthea Symonds and Anne Kelly (eds.), *The Social Construction of Community Care*, Palgrave, pp. 241-253.
- Calasanti, T., 2004, "Feminist Gerontology and Old Men," *the Journal of Gerontology*, 59: 305-314.
- Calasanti, T., Bowen, M. E., 2006, "Spousal caregiving and crossing gender boundaries: Maintaining gendered identities," *Journal of Aging Studies*, 20: 253-263.
- Cavaye, Joyce, 2006, *Hidden Carers*, Dunedin Academic Press.
- Chodorow, N., 1978, *The reproduction of mothering: psychoanalysis and the sociology of gender*, University of California Press. (大塚光子・大内菅子訳, 1981, 『母親業の再生産：性差別の心理・社会的基盤』新曜社)。
- Connell, W. R., 2005, *Masculinities, 2nd Edition*, University of California Press.
- Connell, W. E., Messerschmidt J. W., 2005, "Hegemonic Masculinity: Rethinking the concept," *Gender and Society*, 19[6]: 829-859.
- Davies, H. J. Priddy M., Tinklenberg, J. R., 1986, "Support groups for male caregivers of Alzheimer's patients," *Clinical Gerontologist*, 5[3/4]: 385-395.
- Department Of Health, 1999, *Caring about Carers: A National Strategy for Carers*.
- Friedan, B., 1993, *The fountain of age*, Simon & Schuster. (山本博子・寺澤恵美子訳, 1995, 『老いの泉』上・下, 西村書店)。
- Frazer, N., 1997, *Justice Interruptus: critical reflections on the "postsocialist" condition*, Routledge. (仲正昌樹監訳, 2003, 『中断された正義：「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』御茶の水書房)
- 藤岡純一, 2008, 「スウェーデンにおける家族介護者に対する公的支援」『関西福祉大学研究紀要』11：101-107頁。
- 藤崎宏子, 2000, 「家族はなぜ介護を困り込むのか—ネットワーク形成を阻むもの—」副田義也・樽川典子編『現代家族と家族政策』ミネルヴァ書房, 141-161頁。
- Gilligan, C., 1982, *In a different voice : psychological theory and women's development*, Harvard University Press. (=生田久美子・並木美智子訳, 1986, 『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店)
- Gollins, T., 2002, "Male carer: a study of the interrelations between caring, male identity and age," *Sheffield online papers in social research shop*. <http://www.shef.ac.uk/socstudies/Shop/gollins.pdf#search='Gollins%20Male%20Carer'> (最終閲覧日2007年12月25日)
- Harris, P. B., 1993, "The misunderstood caregiver? qualitative study of the male caregiver of Alzheimer's disease victims," *The Gerontologist*, 33[4]: 551-556.
- Harris, P. B., 1998, "Listening to caregiving sons: Misunderstood realities," *The Gerontologist*, 38[3]: 342-352.
- Harris, P. B., Long, Fuji, 1998, "Men and elder care in Japan: A ripple of change?," *Journal of Cross-Cultural Gerontology*, 13: 177-198.
- Houde, S. C., 2002, "Methodological issues in male caregiver research: an integrative review of the literature," *Journal of Advanced Nursing*, 40[6]: 626-640.
- 一瀬貴子, 2001, 「在宅痴呆高齢者に対する老老介護の実態とその問題：齢男性介護者の介護実態に着目して」『家政学研究』48[1], 28-37頁。
- 一瀬貴子, 2004, 「「介護の意味」意識からみた、高齢配偶介護者の特性：高齢男性介護者と高齢女性介護者との比較」『関西福祉大学紀要』7：75-90頁。
- 井上恒男, 2005, 「『介護者支援政策』再考—日英政策展開の比較」『同志社政策科学研究』7[1]：

- 13-26頁。
- 伊藤公雄, 1996, 『男性学入門』 作品社
- 岩間大和子, 2003, 「家族介護者の政策上の位置付けと公的支援—日英における政策の展開及び国際比較の視点」『レファレンス』 1月号: 5-48
- 春日キスヨ, 2001, 『介護問題の社会学』 岩波書店
- Kaye L. W., Applegate J. S., 1993, “Family support groups for male caregivers: Benefits for participation,” *Journal of Gerontological Social Work*, 20[3/4]: 167-185.
- Kaye, L. W., Crittenden, J. A., 2005, Principles of Clinical Practice with Older Men, in; *Journal of Sociology and Social Welfare*, 32[1]:99-110.
- Kosberg, J. I., 2005. Meeting the Needs of Older Men: Challenges for Those in Helping Professions, *Journal of Sociology and Social Welfare*, 32[1]:9-23.
- Kramer, B. J., Kambert, J. D., 1999, “Caregiving as a Life Course Transition Among Older Husbands: A Prospective Study,” *The Gerontologist*, 39[6]: 658-667.
- Kramer, B. J., 2002, “Men Caregivers: An Overview,” Kramer, B. J., Thompson Jr., E. H., (eds.), 2002, *Men as Caregivers*, Prometheus Books, 3-19.
- 加藤悦子, 2005, 『介護殺人：司法福祉の視点から』 クレス出版
- 小林篤子, 2004, 『高齢者虐待：実態と防止策』 中公新書
- Lloyd, L., 2000, “Caring about carers: only half the picture?” *Critical Social Policy*, 20[1]: 136-150.
- Louie, K, Low, M., (eds.) 2003, *Asian Masculinities: The meaning and practice of manhood in China and Japan*, Routledge Curzon.
- Mac Rae, H., 1998, “Managing feelings: Caregiving as emotion work,” *Research on Aging*, 20: 137-160.
- McFarland P. L., Sanders S., 2000, “Educational support groups for male caregivers of individuals with Alzheimer’s disease,” *American Journal of Alzheimer’s Disease and Other Dementias*, 15[6]: 367-373.
- 三富紀敬, 2008, 『イギリスの在宅介護者』 ミネルヴァ書房
- Moseley Jr., P. W., Davies, H. D., Michael. J. M., 1988, “Support groups for male caregivers of Alzheimer’s Patients: A followup,” *Clinical Gerontologist*, 7[3/4]: 127-136.
- Moss, S. Z., Moss, M. S., 2007, “Being a man in long term care,” *Journal of Aging Studies*, 21: 43-54.
- National Alliance for Caregiving and AARP, 2004, *Caregiving in the U.S.*
- 奥山則子, 1997a, 「性別役割からみた男性介護者の介護」『月刊地域保健』 28[1] : 62-74。
- 奥山則子, 1997b, 「文献からみた男性介護者の介護」『東京都立医療技術短期大学紀要』 10 : 267-272。
- Parsons, K., 1997, “The male experience of caregiving for a family member with Alzheimer’s disease,” *Qualitative Health Research*, 7: 391-407.
- Ribeiro, O., Paúl C., Nogueira C., 2007, “Real men, real husbands: caregiving and masculinities in later life,” *Journal of Aging Studies*, 21: 302-313.
- Pearlin, L. I., Aneschensel C. S., 1994, “Caregiving: The Unexpected Career,” *Social Justice Research*, 7[4]: 373-390.
- Russell, R., 2004, “Social networks among elderly men caregivers,” *The Journal of Men’s Studies*, 13[1]: 121-142.
- Russell, R., 2007a, “Men doing “women’s work:” Elderly men caregivers and the gendered construction of care work,” *The Journal of Men’s Studies*, 15[1]: 1-18.
- Russell, R., 2007b, “The Work of elderly men caregivers: From Public Careers to an Unseen World,” *Men and Masculinities*, 9: 298-314.
- 斎藤真緒, 2003, 「ケアをめぐるアポリアー『ケア』の理論的系譜」『人間科学研究』 5 : 199-210頁。
- Stoller, E. P., 2002, “Theoretical Perspectives on Caregiving Men,” In: Kramer, B. J., Thompson Jr., E. H., (eds.), *Men as Caregivers*, 51-68.



- 多賀太, 2006, 『男らしさの社会学—揺らぐ男のライフコース』世界思想社
- Taga, F., 2005, East Asian Masculinities, in: Kimmel, M. S., Hearn, J., Connell, R. W. (eds.), *Handbook of Studies on Men & Masculinities*, Sage Publications, 129-140.
- Thompson Jr., E. H. (ed.), 1994, *Older men's lives*, Sage publications.
- Thompson Jr., E. H., 2002, "What's unique about men's caregiving?" In: Kramer, B. J., Thompson Jr., E. H., (eds.), *Men as Caregivers*, 20-47.
- 津止正敏・斎藤真緒, 2007, 『男性介護者白書: 家族介護者支援への提言』かもがわ出版
- 上野千鶴子, 2008, 「家族の臨界—ケアの分配公正をめぐる」『家族社会学研究』20[1]: 28-37頁。
- Ungerson, C., 1987, *Policy is personal: sex gender and informal care*, Tavistock. (平岡公一・平岡佐智子訳, 1999, 『ジェンダーと家族介護—政府の政策と個人の生活』光星館)。
- Williams, R., Robertson, S., 2006, "Masculinities, men and promoting health through primary care," *primary health care*, 16[8]: 25-28.
- 全国社会福祉協議会, 1968, 『寝たきり老人実態調査』
- 全国社会福祉協議会, 1977, 『老人介護の実態調査』
- 全国社会福祉協議会, 1987, 『在宅地方老人の介護実態調査』

## 謝辞

本稿は、2007年に日本家族社会第17回学会大会(於: 札幌学院大学)で報告した原稿に大幅に加筆修正を加えたものである。当日フロアから貴重な助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。なお本研究は、平成19-21年度科学研究費補助金若手研究B(課題番号19730347研究代表者: 斎藤

真緒)「男性介護者の実態に関する質的調査研究—家族・ケア・ジェンダーのインターフェイス」の研究成果の一部である。

## 注

- 1) Harrisらは、男性介護者16名に対して、①動機、②介護労働、③仕事や家族生活への影響、④周囲の反応、⑤意味づけについてインタビューを行い、息子グループと夫グループに分類し、比較検討を行っている(Harris, Long and Fujii, 1998)。
- 2) 介護者の年齢分布を「国民生活基礎調査」(2004年)と比較すると、今回の調査は40代以下が少なく80代が多い結果となった。
- 3) 被介護者の年齢分布は、国民生活基礎調査(2004年)とほぼ同じ年齢分布となった。
- 4) ただしこの数値には、家族のみならず、友人も介護対象者に含まれている。(National Alliance for Caregiving and AARP, 2004)
- 5) たしかに、男性による介護や子育てを通じたジェンダー境界の越境やゆらぎは、社会的に構築される男性役割の問い直しという側面をもっている。しかし、男性性の「多様性」の過剰な強調に対しては、男女間の権力関係と同時に、男性間の権力関係をも不可視化してしまうとの指摘もある(William & Robertson, 2006)。
- 6) この政府報告書の概要および批判は、Lloyd(2000)を参照。イギリスの家族介護者政策については岩間(2003)、井上(2005)も参照。なお、本稿では展開できないが、スウェーデンの家族介護者支援政策については、藤岡(2008)を参照のこと。
- 7) とりわけアメリカにおいてHIV/AIDSの介護者の半数以上が若い男性であるが十分社会的に認知されていない状況にあることに配慮している。

## Male carers in Japan: Interface of family, care, and gender

SAITO Mao \*

**Abstract:** Recently, the number of men caring for their wives or their parents has gradually been increasing in Japan. In this paper, I will first summarize current status and difficulties of male Japanese carers. Then, I will investigate perspectives on male caregivers from previous studies in the West. Traditionally, family care has been thought of as a female role, so the existence of male carers has been largely overlooked. A national questionnaire survey concerning male carers, carried out in 2006, revealed the ageing of caregivers and care recipients, health problems among carers, difficulties with continuing work and doing housework, and isolation from the neighbours. On the basis of Western research, it has been emphasized that “the life course perspectives” can completely encapsulate the life of caregivers. In addition, there are a lot of qualitative researches that focus on the change and reconstruction of their masculinities through caring. A focus on male carers will lead us to clarify the situation and problems of informal care and to address the issues of future care provision in Japan.

**Keywords:** male carer, care, masculinity, family responsibility

---

\* Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University